

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	3
➤ 会議・イベント案内	11
➤ 書籍等の紹介	11
➤ 会員募集中	12

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

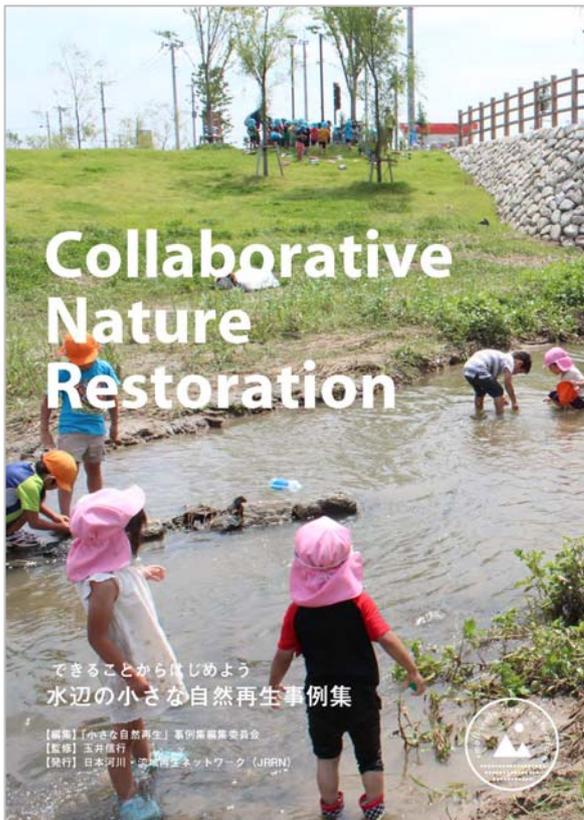
「小さな自然再生」事例集制作プロジェクト進捗報告 ～いよいよ3月に発行です～

JRRN では、市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取組める「小さな自然再生」に関わる事例集の制作を、編集委員会を立ち上げて協働で進めております。

編集委員会を昨年6月に立ち上げてから早いもので9ヶ月が経ちました。当初スケジュールより3か月ほど遅れ、何度も発行の延期をお伝えてしてきましたが、遂に3月下旬に事例集を発行できる運びとなりました。

事例集発行後は、JRRN ウェブサイトを通じてのPDF版の公開、また関係団体への製本版の普及に加え、希望者への製本版配布（無料）も予定しておりますので、完成後に改めてご案内させていただきます。

「小さな自然再生」のプロフェッショナル集団に編集委員としてお集まりいただき作成した本事例集は、河川再生の第一人者である玉井信行先生（東京大学名誉教授/JRRN 顧問）に監修をいただき、デザイナーがこだわりを持って形にすることで、「小さな自然再生」の初心者である JRRN 事務局メンバーが見てもわかりやすい内容にまとめられています。これから河川を学ぶ学生さんから現場のベテランまで幅広い方々に楽しめる内容になっていると思いますので、期待してお待ちください。皆様のお手元に届けられることを私どもが一番待ち望んでいます。（JRRN 事務局・後藤勝洋）



「水辺の小さな自然再生 事例集」 目次

はじめに

1. 水辺の小さな自然再生とは
2. 水辺の小さな自然再生を行うための留意点、安全管理
3. 事例紹介
 - ①北海道/駒生川～サクラマスがのぼる石と木による手づくり魚道
 - ②神奈川県/黒須田川～硬い粘土でできた川底にも緑がよみがえる
 - ③愛知県/五条川～岸辺にみどりをつくると生き物が集まる
 - ④岐阜県/天神川～根固めブロックを並べかえてつくる逆転発想の魚道づくり
 - ⑤岐阜県/桂川～ハの字パーブで淵づくり
 - ⑥滋賀県/天野川～市民パワーの鋼製魚道で、カムバック・ビワサーモン
 - ⑦滋賀県/喜撰川～木箱をつかった手作り魚道
 - ⑧滋賀県/高時川～川の水が減ったときの逃げ場所づくり
 - ⑨兵庫県/住吉川～急こう配の都市河川にもアユがのぼる
 - ⑩兵庫県/安室川～川を耕して希少種を再生する
 - ⑪山口県/島田川～石組み職人的な「水辺の小わざ魚道」
 - ⑫福岡県/室見川～石を掘りおこしてシロウオの産卵環境をつくる
 - ⑬福岡県/上西郷川～小学生と大学生が力を合わせて瀬淵環境を再生（特集）上西郷川現地にて 島谷先生インタビュー
4. 「小さな自然再生」事例集制作座談会

巻末資料

1. 編集委員紹介
2. 小さな自然再生の現場へ行ってみよう (AQMAP 紹介)
3. 参考図書

あとがき

「桜のある水辺風景 2015」あなたの一枚 写真大募集！ ～募集開始のご案内～

桜の美しい季節を迎えようとしています。JRRN では、皆様が 2015 年に撮影された「桜のある水辺風景写真」を今年も募集致します。沖縄から北海道まで、日本の魅力を再発見できるような素敵な桜のある水辺写真をお待ちしております。(5 月末応募〆切)

※写真募集案内ページはこちら

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/558.html>

※「応募シート」はこちら(Word 54KB)

<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/docs/Photo2015form.doc>

※企画チラシはこちら(PDF 558KB)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/files/2015/02/JRRNsakura2015.pdf>

※『桜のある水辺風景写真集』バックナンバー

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/category/cherryphotos>



(JRRN 事務局・和田彰)

桜のある水辺風景 2015 応募要項

応募締切: 2015 年 5 月 31 日(日)

- テーマ: 「桜のある水辺風景 2015」 ※2015 年に撮影された写真に限定させていただきます
- 応募資格: どなたでもご応募いただけます(JRRN 会員・非会員)
- 作品規定:
 - ・応募は一人 5 点まで可能です。ただし応募作品は自ら撮影したものに限りです。
 - ・写真サイズはハガキサイズ程度の印刷でも鮮明なレベルとし、一枚のデジタル画像サイズは 3MB 以内とします。
 - ・個人が特定できる人物画像が含まれる場合は被写体の方の了承を得てください。
- 応募方法: 下記の「応募シート」に、**題名、撮影場所、撮影年月、氏名、住所、電話、Email アドレス、写真利用時の個人情報開示条件、作品への思い等**をご記入の上、写真と共に以下応募先へ送付下さい。
 - ※デジタル画像の場合は応募シートと共に電子メールにて、オリジナル写真の場合は応募シートを同封し郵送下さい。
 - ※電子メールで複数画像を送付する場合、合計サイズが約 3MB 以下となるよう複数回に分けて送付をお願いします。
- 応募期間: 2015 年 2 月 24 日(火) ~ 2015 年 5 月 31 日(日)
- 応募作品の取扱いについて:
 - ・応募期間終了後に、「桜のある水辺風景 2015 応募写真集」や JRRN ニュースレター等でご紹介させていただきます。
 - ・応募写真から優秀作品を JRRN 会員により選定し、JRRN ホームページ上でご紹介させていただきます。
 - ・応募内容が本企画趣旨に沿わないと判断した場合は、上記での紹介を控えさせていただきます。
 - ・(撮影者に事前にご連絡の上で)JRRN 刊行物やウェブサイト等で無償で使用させて頂くことがあります。
 - ・応募作品は返却致しませんのでご了承ください。
- 応募先:

〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階 (公財)リバーフロント研究所内
日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局 (Email: info@a-rr.net)
- 個人情報の取り扱いについて:
 - ・ご記入頂いた個人情報は、作品使用に関するお問い合わせ時に利用させていただきますが、他の目的で利用することはありません。
- 問合せ: JRRN 事務局 担当: 後藤・和田 (E-mail: info@a-rr.net Tel: 03-6228-3862)

流域ガバナンスのフィールド学～環境教育を通じた国際交流の実践

寄稿者：伊藤毅・渡邊剛弘（上智大学国際教養学部）

第 17 回 国際リバー・シンポジウム (Riversymposium) が 2014 年 9 月 15-18 日の日程でオーストラリアの首都キャンベラの国立コンベンション・センターで開催された。シンポジウムのオープニングでは、オーストラリアの先住民に対する敬意を表すための踊りが披露された。3 日間に及ぶ内容は、発表セッション、展示ブース発表、Riverprize 賞セレモニー、そして最終日はキャンベラ近くのコッターダムなどの見学ツアーが実施された。

一リング川流域は、長年の水不足を乗り越えるために、水利権取引、環境保全のための水管理、市民参加による水資源管理の方法について議論された。メコン川流域では、急激に進む経済発展に必要な水資源を、流域を共有する 6 カ国の間での利害調整と環境への負荷を最小限にする開発のあり方の必要性が強調された。



先住民の儀式でシンポジウムがスタート



マリー・ダーリング川流域委員会の座談会



コッターダムの前で水道局の説明を聞く

2014 年の Thies International Riverprize はライン川が受賞した。受賞理由は、1986 年の化学薬品の流入により河川の生物がほぼ全滅したが、流域にある 6 カ国の協力により健全な生態系が再生され、従来の魚類もほぼ回復したことが評価された。国家、地方自治体、そして企業が協力しあって、現在流域人口の 96% が水処理施設につながることになり、水質が改善するとともに、科学的酸素供給量 (COD) が安定した。さらに、堤防の移動や堤外地の深化により、水害対策と土地開墾にもつながった。

今年のシンポジウムの全体テーマは「大河川流域」で、国際レベルからローカルまでの行政関係者、河川土木エンジニア、研究者そして市民団体など河川の専門家が集まり、流域資源の保全、先住民族社会・文化の変容、環境教育のカリキュラム、越境問題への国際協働といった問題が議論された。

発表セッションは、「大河川流域の管理」、「河川政策と管理における科学と知識」、「河川と工業」、「河川とコミュニティ」、そして「河川再生と管理の実践」の 5 つのテーマに分かれ、合計で 30 以上のパネルが組まれ、多くの人が熱心に話に聞き入った。展示会場では、次回のシンポジウム開催地であるブリスベン市、メコン川委員会、企業、シンクタンクなどがブースを設けて各々の活動をシンポジウムの参加者に対して紹介した。

特別プレナリーセッションは、オーストラリアのマリー・ダーリング川流域、ライン川流域、そしてメコン川流域の流域管理の経験が紹介された。マリー・ダ

日本から参加した私たちは、環境教育を扱ったパネルでの口頭発表と展示ブースが集まるメイン会場でのポスター発表で、上智大学の河川をテーマにしたフィ

ールド実践コース Human Ecology: Rivers の経験を共有する機会をいただいた。一緒のパネルには、地元の高中生や大学生が川の水質を定期的に調査することで、川健康状態を確認したり、オーストラリアでも温暖化の影響で稀に見るゲリラ豪雨による川の水量が増して洪水によるコミュニティーの被害を食い止めるかなど、河川との日常的な関わりの中で自分たちの役割を見出すという学習内容になっていたように思われる。パネル終了後には、発表者たちとの意見交換も弾み、私たちのコースに関心を持っていただいたオーストラリアの人から、河川を通じた環境教育における連携の提案もいただいた。

私たちのコース Human Ecology: Rivers は、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」に上智大学の「多様性の調和を目指す学融合型人間開発教育プログラム」が採択されたことにより、人間社会と自然環境の多様性と連結性を学ぶことを目的として、2014年の夏から北海道の釧路・厚岸地方の河川流域において実施されることになった。本コースの一つの特色は、学融合のアプローチにより、日本の環境問題を英語で学ぶことである。2014年度は、社会科学と人文科学を専門とする3名の教員そして国際教養学部で学ぶ学生と一緒に哲学、ビジネス、エンジニアリングを専攻するフィリピン、タイ、香港、米国からの学生総勢12名が参加し、多様なバックグラウンドを持つ学生からなるクラスとなった。専門性に重点が置かれた大学の授業という、専門分野が同じ教員と学生の場合、共通の前提条件のもとに議論することが多いが、このコースでは、参加者の専門分野だけでなく生まれ育った国・文化・言語も異なるため、議論をするためには多様な見解を認め合うことが求められる。実際、釧路・厚岸地方の自然の中で10日間寝食を共にし、環境教育を通じて互いの見解を尊重する考え方を学ぶことで、参加者同士の国際交流を深めることができた。



釧路川蛇行化事業の現場見学

二つ目の特色は、多面的・多層的な自然保護・再生の取り組みを理解するために、そこで生活を営む人々、国家、地方自治体、企業などの自然資源に関する利害をうまく調整するガバナンスの重要性をフィールドから学ぶことである。河川流域は多様な自然資源を人間社会に供給する一方、その享受にあたり立場の異なる人々の利害関係の不均衡および自然環境、そこで暮らす野生動物への負荷を引き起こす可能性がある。こうした連結性を点ではなく面や層として捉えるため、河川流域をひとつのエコシステムとして捉え、流域生態系に様々な形で関与する多数のアクターの視点をフィールドを通じて学んだ。四ツ谷キャンパスでの事前講義では、「河川・森林再生」、「野生動物」、「グリーン・エネルギー」を取り上げ、3つのテーマがどのような関係性をなしているのかを、教員による講義と文献をもとに学習した。北海道のフィールドに入った後は、釧路川流域の湿原・野生動物と別寒辺牛川流域の生態系の再生と保全に携わる官・民・学で活躍される方々の講義と演習から、山・川・海の連結性の重要性を学んだ。



北海道大学厚岸臨海実験所で海洋生物調査

三つ目の特色は、クラス全体が地域や団体と協働することで社会が抱える問題の解決に貢献するサービス・ラーニングという新しいコンポーネントを大学のカリキュラムに取り入れている点である。本コースでは、これまでのように講義のみから知識を得るだけではなく、学生は講義とフィールドから得た知識を生かし、地域が抱える環境問題の解決のために自分たちは何ができるのかを、3つのテーマの密接な関係性に注目してクラス全体で真剣に議論した。まずは、住民の皆さんが毎年行っている釧路湿原の清掃活動にも参加することで地元の皆さんと交流する機会に恵まれ、自然保護・再生には住民の参加と行政の協働が大切であ

ることを肌で感じ取ることができた。1日の活動を終えて戻った宿舎での夕食後のミーティングでは、学生たちのディスカッションは、自然環境を保護・再生すると同時に、今日の道東地域が直面する高齢化と人口減少という切実な問題を理解し、どのような対応策がふさわしいのかという議論にも発展した。学生たちは毎晩遅くまで続いた議論の結果をまとめて、コースのブログに投稿して発信した。特に留学生は、このコースを通じて、日本の河川、自然保護・再生、そして社会の現状を理解して帰国するとともに、自国の状況と照らし合わせて考える機会にもなったようである。



ヒシが大量に発生している達古武沼でカヌー

最後に、私たちのコースの趣旨に賛同して、快く貴重な時間を割いてご指導をいただいた北海道の官・民・学関係者の皆さまがたにこの場を借りて深い感謝の意を申し上げたい。また、私たちのコースについては、以下のホームページから最新情報を発信しているので、訪問していただければ幸いです。

■Human Ecology: Rivers

A Summer Practicum Course at Sophia University

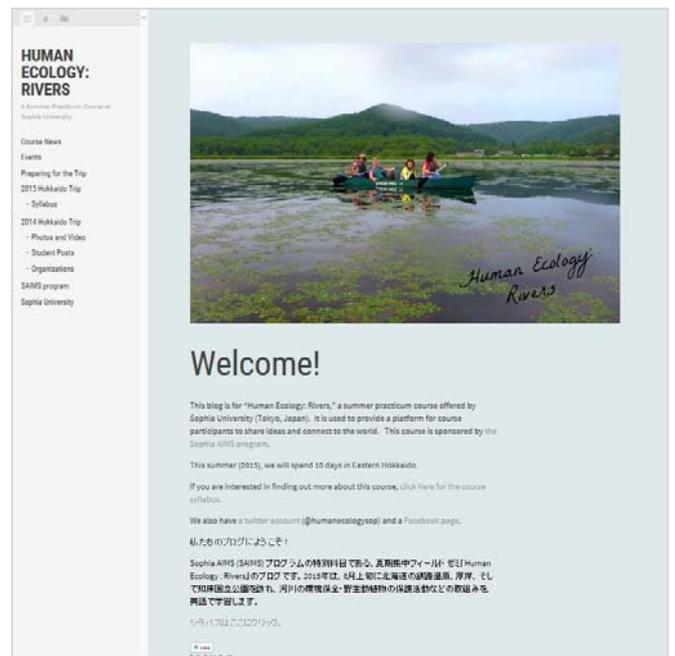
<https://humanecology sophia.wordpress.com>



自然再生について発表会

私たちのフィールド学習を理解していただくために、簡潔ではあるが、以下に釧路と厚岸での主な学習テーマとその担い手をあげてみたい。

学習テーマ	自然保護・再生の担い手
白糖太陽光発電所の見学、エネルギー政策	白糖町役場、株式会社ユーラス エナジー ジャパン
釧路川蛇行復元区域の見学	国土交通省北海道開発局釧路開発建設部
達古武沼の植林事業の見学	環境省釧路自然環境事務所、釧路トラストサルン
釧路湿原の「クリーンデー」	釧路町役場、釧路市役所、標茶町役場、地元住民の皆さん
猛禽類（鳥）の保護	猛禽類医学研究所
丹頂の保護と酪農家の取り組み	タンチョウ・コミュニティー、鶴居村の酪農家の皆さん
釧路湿原と市民活動、エネルギー政策	釧路市役所、釧路国際ウェットランドセンター
石炭とエネルギー	釧路コールマイン株式会社
別寒辺牛川流域の水鳥の生息状況	厚岸水鳥観察館
厚岸湾海洋生物多様性の調査	北海道大学厚岸臨海実験所



「第 10 回川の日ワークショップ関東大会」(2 月 7 日開催) 参加報告

寄稿者：佐々木洸・高鳥圭亮（筑波大学白川(直)研究室『川と人』ゼミ・JRRN 団体会員）



図 1 会場の様子



図 2 発表の様子（遠賀堀川 PJ チーム）

1. はじめに

2015 年 2 月 7 日(土)、東京農業大学で、第 10 回川の日ワークショップが行われました。私たち筑波大学白川研究室から 6 名（井坂七星、中前千佳、鴨志田穂高、森本健太、川畑遼介、坂本貴啓）が発表し、2 名が運営スタッフ（佐々木洸、高鳥圭亮）として参加しました。そして、スタッフとしてタイムキーパーや PC 操作の仕事をしながら、下は小学生の子から大人まで様々な方々の発表を聞かせていただきました。皆さんの発表を通して、幅広い年代層の方々がそれぞれのかたちで河川に向き合っている、河川への愛や情熱を感じました。発表後は厳しいご指摘が飛び場面もありましたが、今回の発表の経験やいただいたご意見の数々は、各々が河川と関わっていくこれからのに向けての糧となり、非常に有意義な一日になったかと思えます。

●入賞結果はこちら（発表件数 16 件）：

http://www.ac.auone-net.jp/~tamagawa/10th_result.pdf

（NPO 法人多摩川センターHP より）

2. 発表内容

【1】 遠賀堀川プロジェクト、2014 年度の夢会議

鴨志田穂高（生命環境科学研究科博士前期課程 1 年）

森本健太（システム情報工学研究科博士前期課程 1 年）

遠賀堀川プロジェクトチームは「遠賀堀川の未来を考える「輪い和い話し夢会議」」について発表しました。輪い和い話し夢会議は地域の方々の「遠賀堀川の美し



図 3 ディスカッションの様子（東彼杵 PJ チーム）

い姿を取り戻したい」という強い熱意によって開催されたワークショップです。全 4 回の夢会議を通じて課題の抽出や検討が行われ、最終回では参加者の遠賀堀川に対する「夢・想い」が絵となって完成しました。

発表後の質疑応答では、関東の大学生が遠く離れた北九州の川を何度も訪問し、地域の方と一緒に活動した点が評価されました。また、発表は歌を披露したり動画を流したりと個性豊かなものが多く、思わず笑顔になれるような雰囲気が心に残りました。

【2】 東彼杵プロジェクトについて

井坂七星（国際総合学類 4 年）

中前千佳（国際総合学類 4 年）

東彼杵プロジェクトチームは「東彼杵町の水辺からのまちおこしの応援」と題して活動発表を行いました。



図4 ポスター発表の様子（現地観測班）

内容としては、東彼杵町の概要、今年度のプロジェクトチームの活動、活動成果についてです。今年度のまとめとして行った町への提案の発表に関して一番興味を持って頂いたので、川沿いにウォーキングコースを設置する案や高架をライトアップする案について細かく話しました。ここでの発表を終えコメントを頂き、若者の視点が重要であるという意見をたくさん頂きました。一方で、若者の方もまちおこしに参加することで成長がないと意味がないといった声も頂いたので、目的意識を明確にしてより真剣に来年度も活動していきたいと思いました。

【3】『あなたの川の流量足りていますか？』

川畑遼介（システム情報工学研究科博士前期課程1年）

現地観測班は、「あなたの川の流量、足りていますか？」というテーマで発表させていただきました。内容としては、山地河川において、流量と河道内物理環境の関係を調べるというものです。発表後には、たくさんのご質問やご意見を頂きました。普段のゼミでは、手法や計算の妥当性等といった研究者側からの質問を多く頂くのですが、この日は研究成果の使い道であったり、魚類との関連性であったりと、河川の現場からの声を得られてすごく勉強になりました。全体の感想としては、ワークショップという和やかなタイトルとは裏腹に、発表者・質問者ともに熱のこもった会だったなという印象です。

【4】白川研究室『川と人』ゼミの紹介について

坂本貴啓（システム情報工学研究科博士2年）

- ① グローバルモデル、経済評価、河川市民団体の主要4テーマの研究活動
- ② 遠賀堀川プロジェクトと東彼杵プロジェクトの2つの地域貢献プロジェクトの展開
- ③ Field Trip やゼミ合宿などゼミ内教育活動
また、これらを2分半に圧縮した研究室紹介動画も紹介しました。



図5 発表の様子（『川と人』ゼミ）



図6 集合写真（東京農業大学にて）

ワークショップではこれらの社会連携を評価するコメントをいただいたとので今後も人との関わりを大事にし、『川と人』ゼミにおける研究活動や社会活動を進めていこうと思います。

3. おわりに

今回の大会では、「歴史・文化・まちづくり」と「環境・生き物」の二グループに分かれ、幅広いテーマで発表が進められました。中でも優秀賞に選ばれた多摩川ふれあい教室と NPO 法人・とどろき水辺の発表は、それぞれ小学生とベテランの方々、将来性と伝統といった対照的な性質を持っており、河川に関わる人々の層の熱さを改めて実感しました。

私たちの活動はそれぞれが大きな票を集めることはありませんでしたが、河川に関わる多様な活動を行っていることを PR でき、貴重な助言をいただいたことは、私たちのこれからの活動への大きな力となりました。第10回「川の日」ワークショップ関東大会実行委員会の方々、発表を聴いて下さった皆さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。

水辺からのメッセージ No.70

岡村幸二 (JRRN 会員)

今に残る大名庭園： 江戸の埋立地にできた潮入庭園で池泉を中心とした典型的な回遊式庭園



撮影：2015年1月（東京都・港区 旧芝離宮恩賜庭園）

◆江戸初期にできた大名庭園のひとつ

この地は江戸・明暦のころ（～1658年）に海面が埋め立てられました。延宝6年（1678）には老中・大久保忠朝の屋敷となり、小田原から庭師を呼んで作庭し、「楽壽園」と命名されました。数多い庭園の中でも地割りと石組は定評があります。明治4年（1871）に有栖川宮家の所有になりましたが、その後宮内庁が買い上げて明治9年（1876）に芝離宮となりました。

◆文化財保護法による国の「名勝」に

関東大震災ではほとんど焼失しましたが、大正13年（1924）昭和天皇のご成婚記念として、東京市の「旧芝離宮恩賜庭園」として公開されました。庭園内で一番の高さ7mの大山からの眺めは見事です。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）



あの日のあの川 リレー日記 ～第2話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第2話主人公 中前 千佳

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：埼玉県芝川)

『私が川デビューをしたあの日』

いつのこと？：大学時代

どこの川？：遠賀堀川

幼い頃の私にとって、川というのはそんなに良いイメージのある場所ではなかった。住宅地にある私の自宅の一番近くを流れるのは、緑川というコンクリート三面張りの都市河川である。汚い水がちょろちょろと流れ、雨が降ると増水する。長い間、川ではなく「ドブ」だと思っていた。臭くて汚く、危ないため、遊ぶ場ではなかった。自宅から少し離れたところのある芝川も、私が目にする部分はいだいぶ下流であったためか、川幅は広く、茶色く濁った水がゆっくりと流れており、遊ぶ場ではなかった。

川に対するマイナスのイメージが払拭されたのは、小学生くらいの頃だろうか。家族旅行で秩父に行き、そこで初めて上流部の川を目にした時の衝撃は今でも忘れられない。水はきれいで冷たく、河床にはさまざまな形の石があり、魚や水生昆虫もいた。自然の中で遊ぶのが大好きな私にとっては最高の環境だった。体が冷え切るまで夢中になって遊んだ。川って案外いいところだな、と幼心に思ったような覚えがある。

そんな私が、大学で偶然にも川の研究室に入った。大学3年生から2年間『川と人』ゼミに所属し、そこで河川環境工学が専門の先生や川系男子の先輩の下で川について学び、川の素晴らしさをたっぷりと教わった。ゼミでの活動は、輪読や先行研究についての勉強、論文作成に止まらない。自分の目で川を見に行くフィールドトリップ、一つの川の源流から河口までを巡るゼミ合宿で幾度となく実際に川を訪れた。さらに、工学系の先輩の調査に同行して川の現地観測を行ったり、河川市民団体についての研究の一環で全国各地の一級水系を巡り、そこで活動する市民団体の方々にヒアリングをしたりもした。このようにさまざまな活動をしてきたが、私がもっとも力を入れたのは遠賀堀川プロジェクトと東彼杵プロジェクトである。これは、ゼミ内有志の学生が集まり、福岡県の遠賀堀川で現在進行中の河川再生活動及び長崎県東彼杵町での川を活かしたまちづくり案の作成にかかわるものである。

前置きが長くなったが、ここでは私が初めて遠賀堀川を訪問した日、すなわち私が川デビューをしたあの日のことを思い出して書いてみたいと思う。

私が川デビューをしたのは、大学2年生の2月である。ゼミ配属より一足先に遠賀堀川プロジェクトの活動にかかわらせてもらうようになって間もないこの日、私は初めて現地調査というものに同行したのだった。初めて訪れる遠い福岡の地で、川についての知識も乏しく、調査で何を見ればいいのかも掴めず、まさに右も左もわからない私はただひたすらに必死で先生と先輩についていった。なぜ必死だったかという、①歩いて調査している最中に雪が降ってきた、②先生も先輩も興味の赴くまま素早く歩き回るため、見失わないように気を付けなければならない、③さまざまな関係者が入れ代わり立ち代わり加わってはすぐに去っていくため、覚えられない、という状況だったからである。初めてにして、2年間のゼミ生活の中で1、2を争う過酷な経験をしたのではないかと思う。確かに過酷ではあったが、今までこんなに真剣に一つの川を隅から隅まで観察することはなかったので、とてもよい経験になった。

もう一点、当時の私にとってよい経験となったのは、さまざまな立場で川にかかわっている方々との出会いであった。川好きの人が集まれば、自己紹介で名前や所属、出身地について話すと「〇〇市かあ。じゃあ、△△川の近く？」というように話が膨らんでいく。川のことになれば話は尽きず、初対面の人同士でも熱い議論が始まる。その様子がとても新鮮であった。本当に川が好きなのだろうということが伝わってきた。早く自分も話についていけるようになりたいと思った。

遠賀堀川という川を見た感想として私が感じたのは、「想像していたよりもきれいだな」ということであつた。私の自宅近くの都市河川に比べたら、水もきれいで様相もちゃんと川に見えるなど思つたのである。住民団体の方々が地道に活動に取り組んできた成果に思いをはせると同時に、再生への希望を持つことができた。そして、ドブ川と言われる状態になつても遠賀堀川を見はなさず、再生させようと懸命に活動する方々の熱意に触れ、ぜひともその活動を応援していきたいと思つた。

私はこの日から卒業するまで遠賀堀川プロジェクトにかかわることになったのである。

以上が、私が川デビューをした日の思い出である。

この時に寒さに凍えたのがトラウマとなり、以来、冬に川に行くと聞くと少々警戒するようにはなつたが、多少のことではへこたれない強さも身に付いたように思う。また、川で生き生きと活動する方々と出会つたことで、それまで知らなかつた川の魅力—すなわち、人と人とがつながる場としての川の機能に気付くことができたことは、私が川というものに惹かれていくきっかけとなつた。

今の私の原点として、この日のことはこれからも忘れることはないだろう。

(次は井坂七星さんにバトンを託します)



(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■第19回荒川流域再生シンポジウム「自然湖上のアユを復元するための連携について語ろう」

○日時：2015年3月14日(土) 13:00-16:30

○主催：NPO法人荒川流域ネットワーク

○場所：国立女性教育会館(埼玉県比企郡嵐山町)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1932.html>

■第7回 応用生態工学会 全国フィールドシンポジウム in 熊本～河川・沿岸環境の変化と土砂管理～

○日時：2015年6月12日(金)～13日(土)

○主催：応用生態工学会

○場所：熊本市国際交流会館(熊本県熊本市) 他

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2097.html>

■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。(JRRN事務局)

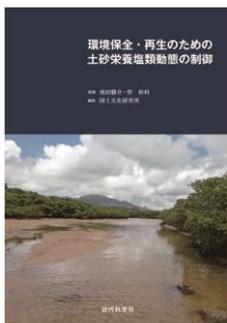
(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2015.3.6-8 (ダッカ/バングラ) 5th Int. Conf. on Water and Flood Management
- 2015.4.12-17(Daegu/韓国) 7th World Water Forum
- 2015.6.15-19(Provence/フランス) River Restoration; Geomorphic and Ecological Tools
- 2015.6.28-7.3(ハーグ/オランダ) 36th IAHR World Congress
- 2015.6.30-7.2(Wageningen/オランダ) Int. Conf. on River and Stream Restoration
- 2015.8.2-7(シンガポール) 7th APHW Conference
- 2015.9.21-23(ブリスベン/オーストラリア) 18th international Riversymposium
- 2016.2.8-12(メルボルン/オーストラリア) 11th Int. Symposium on Ecohydraulics
- 2016.7.27-29(リエージュ/ベルギー) 4th IAHR Europe Congress
- 2016.8.28-31(コロンボ/スリランカ) 20th Cong. of IAHR Asia Pacific Division
- 2016.9.19-22(Stuttgart/ドイツ) 13th Int. Sympo. on River Sedimentation

書籍等の紹介 Publications

■ 環境保全・再生のための土砂栄養塩類動態の制御 (2014.10 発刊)

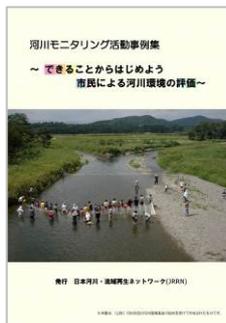
- ・監修：池田駿介・菅 和利
- ・編集：国土文化研究所
- ・出版社：株式会社近代科学社
- ・価格：4,000円＋税
- ・出版年月：2014年10月



JRRN事務局を共同運営する(株)建設技術研究所国土文化研究所より2014年10月に発刊されました。本書は、陸・川・海における水・土砂栄養塩類の移動・制御、およびそれらが生物・生態系に及ぼす影響を野外や実験室において行った研究の成果など、自然環境再生に向けた新たな視座が紹介されています。

■ 河川モニタリング活動事例集～できることから始めよう 市民による河川環境の評価～(2014.3 発刊)

- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

※本冊子の入手方法

JRRN事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

info@a-rr.net / 電話：03-6228-3862

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2015年2月28日時点の個人会員構成
(個人会員数：681名、団体会員数：54団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階

公益財団法人リバーフロント研究所 内

Tel: 03-6228-3862 Fax: 03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

